

私の弟

鶯谷中学校 一年 三上 紗奈

皆さんは、自分達一人一人が奇跡の塊だということを知っていますか？

私には十一歳の弟がいます。二歳の時に脊髄の病気をして、その時から車椅子で生活しています。病気になってすぐの時は、今のような生活ができるか、将来のことが全く分からなかったらしいので、両親は大きな怪我もなく元気に生活出来ている私達に、毎日が当たり前ではなく、奇跡の連続だと感じているようです。

私からみる弟はとても努力家です。

胸から下の機能が不自由な為、ご飯を食べるということも、字を書くことも、普段、私達が何気なくしている生活動作のすべてを、自分なりに工夫し、努力を重ね獲得しています。

また、誰とでも仲良くできる素晴らしい能力を持っています。

短い時間でも、すぐ友達を作れて、年齢関係なく、みんなと仲良くしようとします。

弟には数え出したらキリがないほど、いいところがたくさんあります。しかし、私の思う弟のいいところは、特別なすごいことではなく、だれもがある長所と一緒にだと母は言います。

時々、「どうして車椅子にのってるの？」や「一生、車椅子で生活するの？」と聞いてくれる人がいます。

これらの質問は、弟のことを知ろうとしてくれていることがわかり、とても嬉しく感じます。

ですが、皆さんと同じではない車椅子にのっている弟のことを“障がい者”と差別的な態度をとる人はいます。

外を歩けば振り返ってまで見つめられたり、指を指して一緒にいる隣の人に弟の存在を知らせたり、かわいそうと言われたり。

一緒に出掛けている時に、珍しい物を発見したかのように、食い入るように見過ぎて、物にぶつかりそうになったり、段差につまずいたりする人もいました。

自分達と同じではないというだけで、差別したり、見下すような言動や態度を取る人がいるのは、とても残念なことです。その人達をすぐ変えることは出来ないけれど、弟のことを知って欲しいと思います。

私も、知らないことをやろうとするのは怖いです。例えば、大嫌いな予防接種の注射です。経験のある人は少し痛いけれど、そんなに怖いものではないと認識していると思います。しかし、もし一度も経験がなく、説明も不十分だったら、恐怖でしかないと思いませんか？

知らないということは、怖いことなのだと私は思います。

その「知らなくて怖い」を乗り越え、勇気を出して声をかけてくれたり、その人なりに理解しようとしてくれる人が増えることは、弟からしても嬉しいことだし、一人一人の個性を尊重し合える社会への第一歩のように思います。

弟が夏休みに旅行先で仲良くなった子達と体育館でバスケットボールをしているとき、途中から加わった一人の子から嫌味な言葉をしつこく言われたそうです。

小さな子から小学生まで、皆で遊べるようにルールを変えてバスケットをしていたのですが、多分、弟が特別扱いになったと受け取られ、二人きりになるタイミングで何度も難癖を付けられて、プレー中に意地悪をされ、言い返す間もなく、悔しい思いをしたようでした。

その話を後から聞いて、いろいろ言ってやりたい気持ちになりましたが、もしかしたら相手の子は、今までにない経験で、自分と違うことが受け入れられなかったのかな？と感じました。

その出来事とは反対に、悪気なく差別的な言葉を言ってしまったと、わざわざ謝りに来てくれた親子の人もいました。

その子は、弟の名前を覚えてなくて、特徴である「車椅子の子」と呼んでしまっていたとのことでした。

弟は全然悪い気はしていなかったようで、一緒に楽しく遊べた事の方が嬉しかったようです。

私と弟には違いがたくさんあります。出来ること、苦手なこと、得意、不得意。

生活の中で背の高い人が背の低い人のために物を取ってあげるように、視力のいい人が視力の悪い人の代わりにそっと読み上げてあげるように、それぞれが違いを受け入れ、それぞれの個性を尊重し、皆が等しく可能性を伸ばしていける優しい世界が、当たり前になっていったらいいなと思います。

両親はよく、私達姉弟は宝物だと言いますが、皆さんも同じ“誰かの宝物”なんだと思います。